

## 「大好きな母」

群馬県 齊藤紀更

私は、母の住む実家から、車で2時間程の場所で、大学に通うため1人暮らしをしている。今日は半年振りに、母の元へ帰ることにした。

5時前、自然と目が覚めた。大好きな母と少しでも長く過ごしたいという気持ちが無意識のうちに働いたためか、普段からは考えられない時間に目が覚めた。顔を洗い、キッチンへと向かう。前夜、母に朝ご飯を作ってあげる約束をしたのだ。

冷蔵庫を開けて、胸が詰まる思いがした。それはかつてのそれとはあまりにも違っていた。かつて、父、母、そしてあたしで住んでいた頃は、その中は食材に溢れていた。父の好物だったドラ焼きや、私の大好きなアイスやたこ焼き・・・色々なものでごったがえしていた。

それが今は・・・母一人の暮らし。

少しの冷凍ご飯と少しの野菜やお肉。

本当に必要最低限のものしかなかった。

母は毎朝、この冷蔵庫を開けて何を思うのだろう。

毎日一人、3人で過ごした家で、一体何を思うのだろう。

母も今年で50歳。

母は私の中でずっと「お母さん」であり続け、その「お母さん」は決して弱音など吐かない気丈で優しい人であり続けているけれど、母も確実に年を取り、時として苦労を重ねた者しか見せることのない表情をみせるようになってきたこともまた事実。

いつまでも母に甘えていていいのだろうか……

いや、甘えていたっていいはずだ。だって母はあたしの「お母さん」なのだから。

でも、そろそろ母にも甘えさせてあげなきゃいけないのかもしれない。だってあたしは「お母さん」の「娘」なのだから。きっと冷蔵庫開けるたびに、母は私や父、そして両親のことを思い出すのだろう。

「元気でやっているのかな」

「栄養のあるものを食べているかな」

時々母からかかって来る電話。

それはそんな私を心配する気持ちとそしてほんの少しの私に頼りたい気持ちが詰まっているのだろう。

朝からそんなことを考えながらリゾットを作った。

母はそのリゾットを「おいしい、おいしい」と言って食べてくれた。

「人様がご飯を用意してくれるなんて、本当にありがたいことだ」と私の祖父母は口癖のように言っていたが、母は本当に何回も何回もそう言った。母も年を取ったのかなと思った。

そして、今度の休みはなるべく長く「お母さん」と一緒にいようと思った。